

日本一の城陽の碾茶てんちや

全国茶品評会で1等1席の農林水産大臣賞を何度も受賞した碾茶てんちやが、城陽市内の茶園で栽培されています。

「日本一の宇治茶が、どんなところで栽培されているの？」と城陽市内を散策しても、あまり茶畑を見かけません。実は城陽市にある茶園は、木津川沿いに集中しています。しかも、その大半が河川敷の中にあるため、堤防のせいで茶園が見えにくく、その存在に気づかないことが多いのです。

春になると約300本の桜が満開になる「桜づつみ寺田緑地」のあたりから下流にかけて、鮮やかな緑の茶畑が広がり、中景には「流れ橋」で知られる上津屋橋、さらに遠くに天王山から愛宕山にかけての峰々が霞んで見えます。

この風景は、平成27年度に京都府景観資産登録地区に登録され、さらに「流れ橋と兩岸上津屋・浜台の「浜茶」が「日本茶800年の歴史散歩」のひとつとして日本遺産に認定されました。天気の良い日には、市民の憩いの場として、堤防沿いを散歩、ジョギング、サイクリングなど、思いおもいに過ごす方で賑わいます。





木津川が育んだ日本一の城陽の碾茶

茶の栽培も流通も

木津川が土壌をつくった

城陽市で茶の栽培がいつ頃から始まったかを記す資料は残っていません。全国で茶の栽培が盛んになった室町時代からではないかと考えられています。

城陽市を流れる木津川は、古来から水上交通が盛んで、主要な村には浜が設けられ、年貢米や農産物、都からの品物などが運ばれていました。

現在の様子から想像できないほど水量があった木津川は、大雨になると洪水を起こし、城陽の人々を苦しめてきました。

洪水から守り、洪水の恩恵を得た尾無堤

城陽市富野のあたりで木津川と支流の長谷川が合流し、ここから下流に向けて、本堤防を守るために築かれた「尾無堤」という堤防があります。

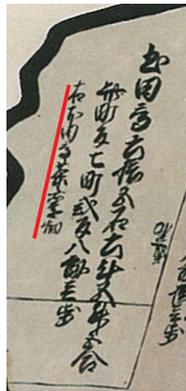
が記されている絵図（年代不詳）が残っており、絵図の尾無堤と本堤防の間に「右本田高茶園畑」と記述されています。

この区域は「浜台」と呼ばれ、洪水になると水に浸かりました。茶の木は水に強かったこともあって、浜台で茶が栽培されたと考えられます。また水が引

※歴史的文献や資料に基づき、本項では「浜台」と表記しています。 城陽市歴史民俗資料館監修



尾無堤等絵図〔江戸時代〕個人蔵



赤線部分に「右本田高茶園畑」と記されている

くと茶園には「ニコ」と呼ばれる養分の多い泥が残りました。この泥が茶の木を育て、美味しい茶ができたことで、城陽で茶の栽培が続いたのかもしれない。

尾無堤から学んだ？

木津川の河川敷にある浜台は、上流に竹林があるのが特徴です。洪水のときに竹林が水流の直撃

を防いで茶の木を守り、新茶の茶葉を直射日光から守る本簀を作るときの材料にもなります。

この合理的に植えられた竹やぶは、もしかすると、尾無堤を真似たのではないのでしょうか。

私たちの先達は、木津川の多くの恩恵を受けながら、水害の被害を抑えるように努めてきました。そんな様々な努力と、日々の積み重ねが、城陽市を日本一の宇治茶・碾茶の産地にしたのかもしれない。

現在の尾無堤と浜台の様子。上流から下流を望む。右の絵図との比較は絵図を180度回転させる



青線…木津川本堤防
赤線…尾無堤
黄色線…近鉄京都線